

# 埋蔵文化財 愛知

No.2



## 清洲城とその城下町の調査

— 名古屋環状2号線建設に伴う発掘調査 —

清洲城は、織田信長の居城として有名ですが、実際には室町～江戸時代初頭にかけて、幾人もの城主が入れ替り、修築工事も何度か行われたようです。調査の結果でも、厚さ50cm程の大規模な盛土を挟み、上下二時期の遺構面を確認することができました。

写真では、下部の白線を引いた土壇と右側の柱穴列が新しい時期、上部の何条かの溝が古い時期のもので前者は概ね16世紀末～17世紀初頭、後者は16世紀の前半代に相当します。

## シリーズ 清洲城下町に挑む No 2

## 遺物から見た城下町 その1

三重の堀に囲まれ、一説によれば人口7万人を擁していたとも言われる清洲城下町も慶長15年(1610)から3年の歳月をかけた「清洲越し」によって町は解体されたのである。これまで清洲城下町に関連する資料として『清洲村古城図(蓬左文庫所蔵)』と伝清須城出土鯪瓦(しゃちがわら)、金箔を押した軒丸瓦や軒平瓦、鳥衾飾瓦(とりぶすまかざりがわら)といった各種の採集された瓦がある。古城図と瓦以外清洲城下町を語る資料はなく、城や家臣団をはじめとして城下町に集まった人々の生活や文化の一端をうかがい知ろうとしても限られた資料のみでは内容的に極めて乏しく、まさに伝承の世界に生きる城下町であった。

しかし、名古屋環状2号線の建設に伴う清洲城下町遺跡や朝日西遺跡の発掘調査によって、縦横あるいはL字状に屈曲した素掘りの溝や桶組みの井戸、中堀、外堀の一部などが検出され、こうした遺構群より大量の遺物が出土し、城下町に集まった人々の生活の一端が明らかになってきたのである。

出土遺物では、瀬戸・美濃で生産された椀、皿、鉢、摺鉢、茶入れ、水滴、常滑の甕などの陶磁器類が圧倒的に多い。また数点ではあるが唐津の椀、楽茶椀、備前の摺鉢、染付の椀・皿の中国陶磁類も見られる。土器類では皿、鍋、釜、瓦質の風炉、香炉、木製品類では漆器の椀、折敷、箸、下駄、櫛、堆漆香合、石製品類では石製小型火炉、硯、金属製品類では燧金(ひうちがね)、包丁、鎌、鋸、古銭など多種多様な遺物が出土しており、これら遺物の大半が食生活に関連するものである。

日常生活用具として、漆塗りの椀や鉄釉・灰釉・長石釉が施された椀、皿、鉢、向付、あるいは鉄釉・銅緑釉の徳利などの施釉陶器のほかに土師質の皿も多く出土している。大甕や壺は液体貯蔵具として用いられ、他に木製の桶、曲物なども利用されていた。調理用具として素焼きの鍋・釜・摺鉢が、灯火具として燧金と灯明

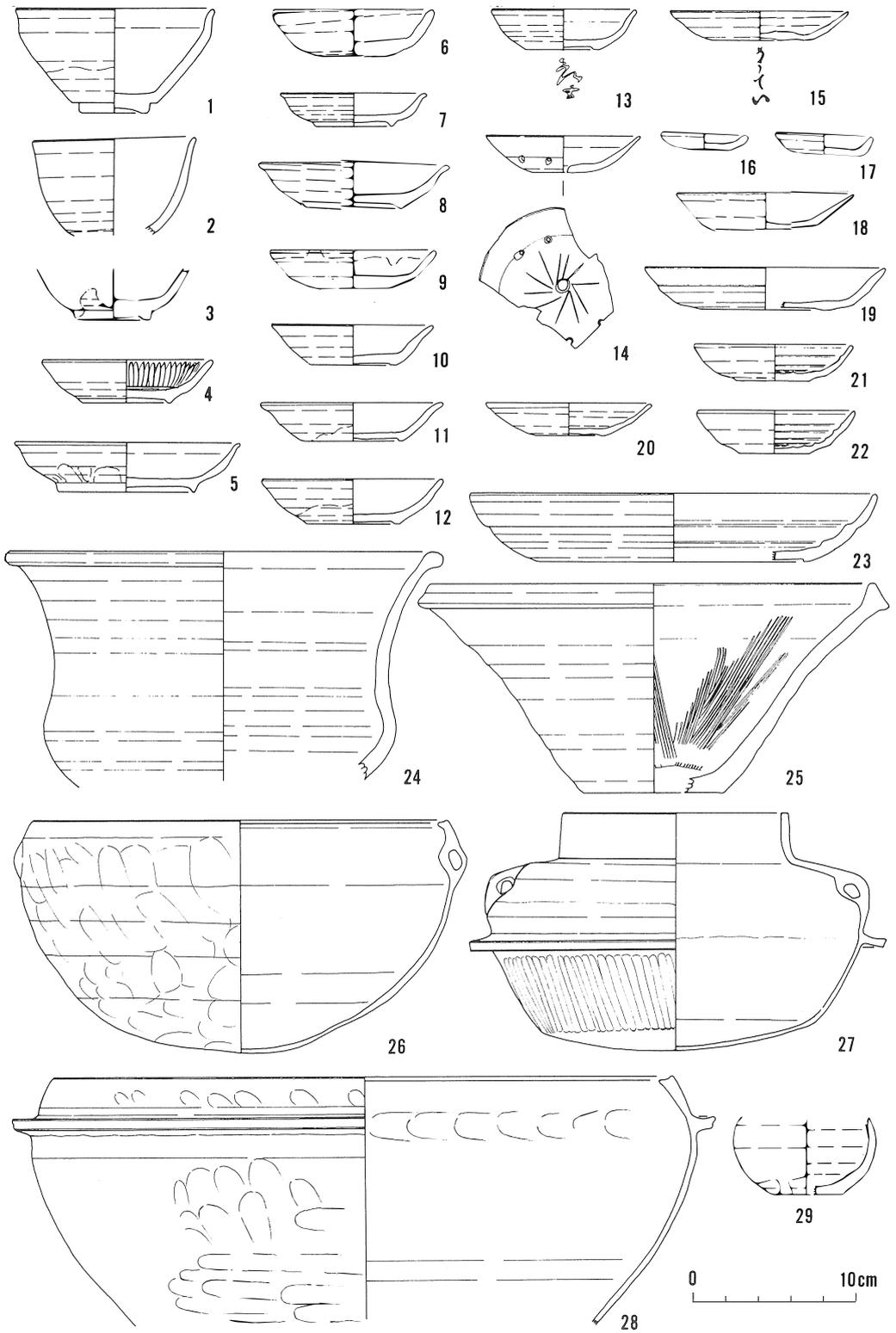
皿が、文房具は水鳥や猿を模した水滴と長方形の石製硯が出土している。また当時盛んであった「茶」の道具として茶椀、茶入れ、茶壺、香炉、風炉が出土しているが茶臼や花生は出土していない。日常生活用具に比べ農具や工具といった生産に直接関連する用具はほとんど出土せず、鞆の羽口と鉄滓の出土によって野鍛冶を想定することができるのみである。

右頁に図示した遺物は、清洲城下町遺跡60F区の溝S D O 3より出土したもので、溝は幅約1 m 80cm、深さ約1 mを測る断面U字形をし、美濃街道の下を北西に走っている。

瀬戸・美濃産の椀、皿、摺鉢や常滑産の甕などの陶器片や中国陶磁の染付皿、鍋、釜、風呂、皿といった土器類が出土し、施釉陶器よりも土器類の方が出土量が多い。1は鉄釉天目茶椀で高台には焼成後彫り刻んだ判読不能の銘があり、2は灰釉丸椀、3は鉄釉丸椀の高台片である。4は灰釉菊皿で2ヶ所に彫りのない部分をもつ。5は灰釉中皿、6は口縁端部に灰釉が施釉された皿、7は灰釉小皿、8は16弁の菊花文が見込みにある灰釉皿、9は口縁端部に鉄釉が施釉された皿、10、11は鉄釉の稜皿、12は鉄釉皿、13は碁笥底に焼成前のへら書きによる銘のある鉄釉皿である。14~19は土師質の皿で14は胴部に4ヶ所と底部に1ヶ所の穿孔があり、糸切り痕の残る底部にはへらによる直線が11本巡っている。15は「そうてい」と墨書のある皿で16、17以外は糸切り痕が残る。20~22は内面に同心円状の稜帯をもつ無釉の皿である。23は内面に2段の段付鉄釉盤、24は鬼板化粧の鉢、25は摺鉢、26は内耳鍋、27は茶釜型の羽釜、28は羽釜、29は備前風の小壺である。

出土遺物の中から主なものを図示したが、この他に瀬戸・美濃産の燈籠かと思われる破片も出土している。これらの遺物は従来の編年であれば16世紀初頭を中心とする年代を与えうるものであり良好な一括資料である。

(小澤一弘)



清洲城下町遺跡 60F区SD03出土遺物 1/4 (・印 土師質土器)

市町村だより

## 一宮市博物館(仮称)の建設

一宮市教育委員会

『新編一宮市史』の編さん事業が開始されて四分の一世紀が過ぎた。その過程で考古資料・古文書・民具類が数多く収集された。市の内外を問わず寄贈・寄託されたものも多いが、それらを公開・展示する施設が望まれ、昭和48年の市第2次総合計画の中に“郷土の歴史、民俗資料などを集積した郷土資料・博物館の設置を検討”することが述べられている。52年には博物館建設基金条例を施行。56年の第3次総合計画に至って“博物館等の建設を促進する”ことが決った。

58年8月博物館建設委員会設置規程が定まり59年1月博物館基本構想等作成委員を委嘱し11月に答申を受ける。答申にふさわしい建築と展示の各設計者が決ったが、既設の博物館には建築のみが先行し展示がこれに追隨した事例がま

まあり、そこに勤める学芸員の不評を買っている。そこでその轍を踏まない様に展示サイドの意見を採り入れた建築設計が出来上った。

当市の施設は市内大和町の古利臨済宗妙興寺に隣接して建てられるが、延床面積 4,573m<sup>2</sup>、地上2階、地下1階、周囲の景観を損わない様に配慮された。常設展示は部屋ごとに区切られた考古、古代～近世、近・現代の3室からなり各室自由に見学ができる。展示の基本設計は未完成であるが、考古、近・現代室はかなり充実したものになろう。また、教育普及室も新機軸が出されよう。

県内の市町村には年々博物館等の建設が進められているが、それぞれの土地の歴史の展示に苦心の跡が伺われる。何回となく訪れたいくなる施設づくりは小手先のみでは出来ない。企業努力にも似た創意工夫が要求される。言うは易いが、これが私たちに課せられた問題であり、目下展示資料の整備に努めている。

(一宮市博物館建設準備事務局長 岩野見司)

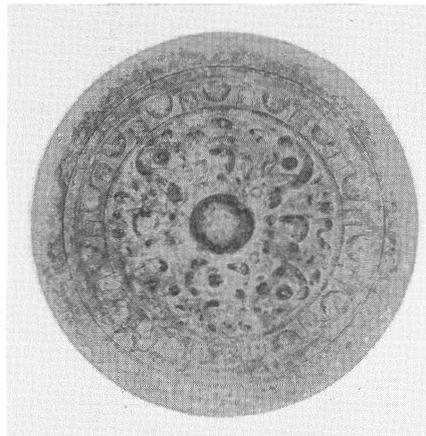
## 岡崎市東部の古墳

岡崎市教育委員会

岡崎市には、東部丸山町周辺、北部岩津町周辺、中央部明大寺の丘陵部、矢作川右岸旧矢作町地内に主要な古墳群が存在している。

この内、丸山町周辺の古墳群は三河山地から延びる低い丘陵部と矢作川支流乙川の河岸段丘上に立地する30基以上の古墳からなり、そのほとんどが横穴式石室を内部主体とする古墳時代後期の円墳である。これらに若干先行する古墳としては、埴輪片が採集されている奥白羽根1号墳、須恵質円筒埴輪をめぐらす前方後円墳と考えられる亀山1号墳、堅穴系の石室を持ち、円筒埴輪、各種形象埴輪、武具、馬具類を出土した帆立貝式前方後円墳の経ヶ峰1号墳があり、各々小群を形成している。

亀山2号墳は、1号墳とともに標高約70mの丘陵上に立地していたが、昭和34年、愛知県種



亀山2号墳出土画文帯神獸鏡

、 畜場放牧地の整地工事の際未調査のまま破壊された。このため、古墳の規模等は不明であるが、状況から横穴式石室を内部主体とする円墳であったと考えられている。この時画文帯神獸鏡、珠文鏡、直刀、有孔砥石、6世紀代の須恵器が採集されている。

画文帯神獣鏡は、径20.9cmで、上位に伯牙、下位に黄帝？、左右に東王父、西王母の四神と四乳に獣像を配した同向式のものである。14の方形帯には、各々四字一句が刻まれている。この鏡には、21面の同範鏡が知られており、その内7面が伊勢湾周辺の三重県茶臼山古墳、神前山1号墳、神島（伝世）及び本古墳で検出されている。本古墳出土鏡が伊勢湾交通の要所であ

る神島の伝世鏡と対岸古墳出土鏡と同範であることは、畿内と西三河を結ぶルートとしての海上路の重要性を示すものと考えられる。このことは、西三河最大の前方後円墳である吉良町正法寺古墳が海岸部に立地していることからも伺われ、後の藤原・平城宮木簡にみられる贄のルートに引き継がれていくと考えられる。

（社会教育課主事 荒井信貴）

### 東海市名和町トメキ遺跡出土遺物

東海市教育委員会

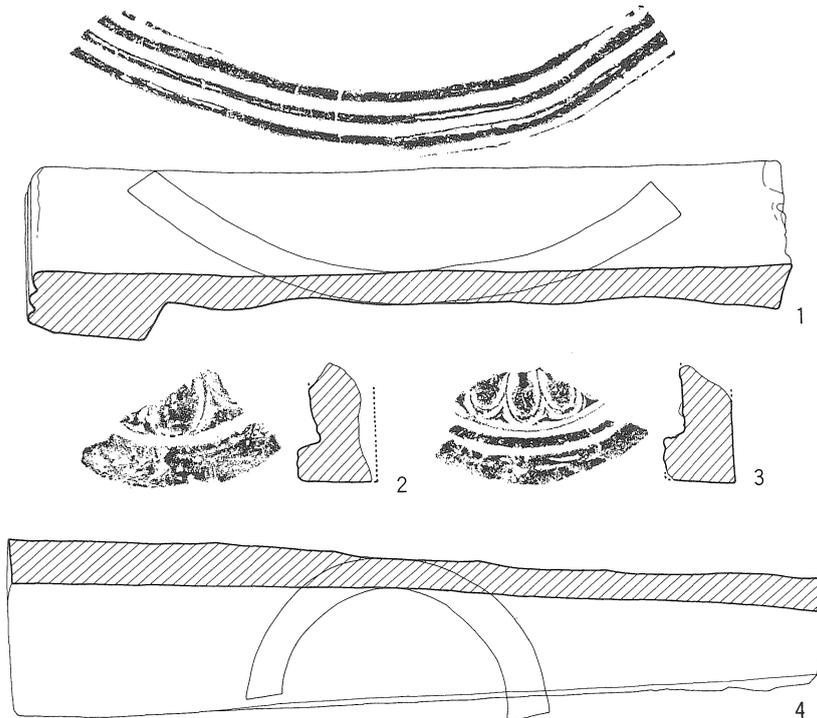
昭和60年2月初旬に、東海市名和町の県道名古屋・半田線バイパス工事現場から瓦などが出土し、3月初旬に東海市教育委員会が発掘調査を実施した。

この一帯は現在では宅地化しているが、かつては水田だったところで、水田下の標高約2.5mのところから広がる礫層面に瓦だまりを検出した。

瓦だまりは一半を欠失しているが、長さ4.4m、深さ0.5m程のおおむね円形をなすものとみられる。この中から、平瓦が約40枚（接合して1枚になったものと完形のもののみ）のほか重弧文軒平瓦（1）、単弁蓮花文軒丸瓦（2）行基葺式の丸瓦（4）などが雑然とした状態で出土した。また、瓦だまりの外の平坦面には細弁蓮花文軒丸瓦（3）、鴟尾もあった。時期は白鳳時代のもものとみられる。

これらの資料については、現在、東海市立郷土資料館において整理作業をすすめている。

（平洲記念館主査 立松 彰）



トメキ遺跡出土瓦類 1/4

資料紹介

清洲城下町遺跡出土  
紀年銘瓦

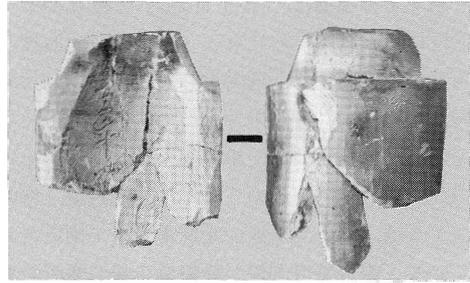
清洲城下町遺跡の60B区（西春日井郡清洲町一場字矢倉地内に所在）より紀年銘瓦が出土し、清洲城下町の歴史を解明するうえで、貴重な資料として注目されている。瓦は堀状遺構より出土していて、その遺構は、「清洲村古城図」（蓬左文庫所蔵）などによって知られる三重の堀のうち、中堀の東北隅にあたる。

瓦は、玉縁丸瓦で、幅16.5cm、残存長20.7cm、厚さ2.5cm、玉縁幅4.5cmを測る。外面は丁寧なへら削り調整が施されていて、内面も刻書のためか布目痕を板状工具で削って器面調整している。刻書は、半乾燥の時点で篋状工具でなされていて、

清□

天正十四□

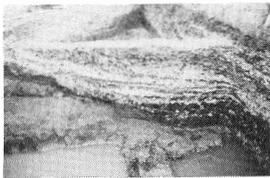
と記されている。



この瓦は、中心飾が桐文の均整唐草文軒平瓦とセットをなす大型の巴文軒丸瓦（珠文数18）と組み合わさるもので、清洲城関連の瓦のなかでも最も古い一群に属するものと考えられる。

また天正14（1586）年については、織田信長亡きあと尾張の領主となった織田信雄（信長次男）が清洲に入城し、城の修理拡張を行った年として、従来から注目されていた。こうしたことから、近世的な清洲城の成立の一時点をここに求めることができるであろうし、ひいては三重の堀を巡らす近世的な城下町の形成もここに始まるということもできるであろう。（60B区は4～7月に調査）（遠藤才文）

発掘ニュース

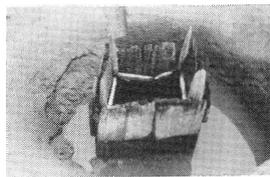


貝層断面

朝日遺跡 — 南集落を囲む環濠の調査を実施。環濠の北側には大規模な貝層が形成され（弥生中期）、土器・骨角器・石器等が多量に出土した。

朝日遺跡・清洲町大字朝日

大淵遺跡・甚目寺町大字甚目寺字大淵



井戸

大淵遺跡 — 奈良～平安時代の掘立柱建物跡を6棟と井戸枠を持つ井戸跡を検出した。その西側には、集落の西限界を示すと思われる溝状遺構と、それに伴う柵列が設定されていた。

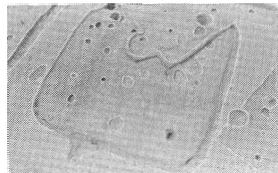


掘立柱建物跡



調査区全景

石堂野遺跡 — 遺跡は宝飯郡御津町豊沢の丘陵尾根平坦地に所在する。古墳時代末～平安時代にかけての竪穴住居跡を主とした集落遺跡である。また、16世紀の建物跡も検出された。



竪穴住居跡

## 遺跡紹介

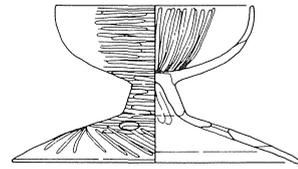
## 土田・廻間遺跡

土田・廻間遺跡は愛知県西春日井郡清洲町土田から廻間地区にかけて所在し、濃尾平野の海拔零メートル地帯に展開する遺跡である。大きく2つの時期が考えられ、一つは弥生時代末～古墳時代にかけて、今一つは平安時代末～室町時代にかけてである。

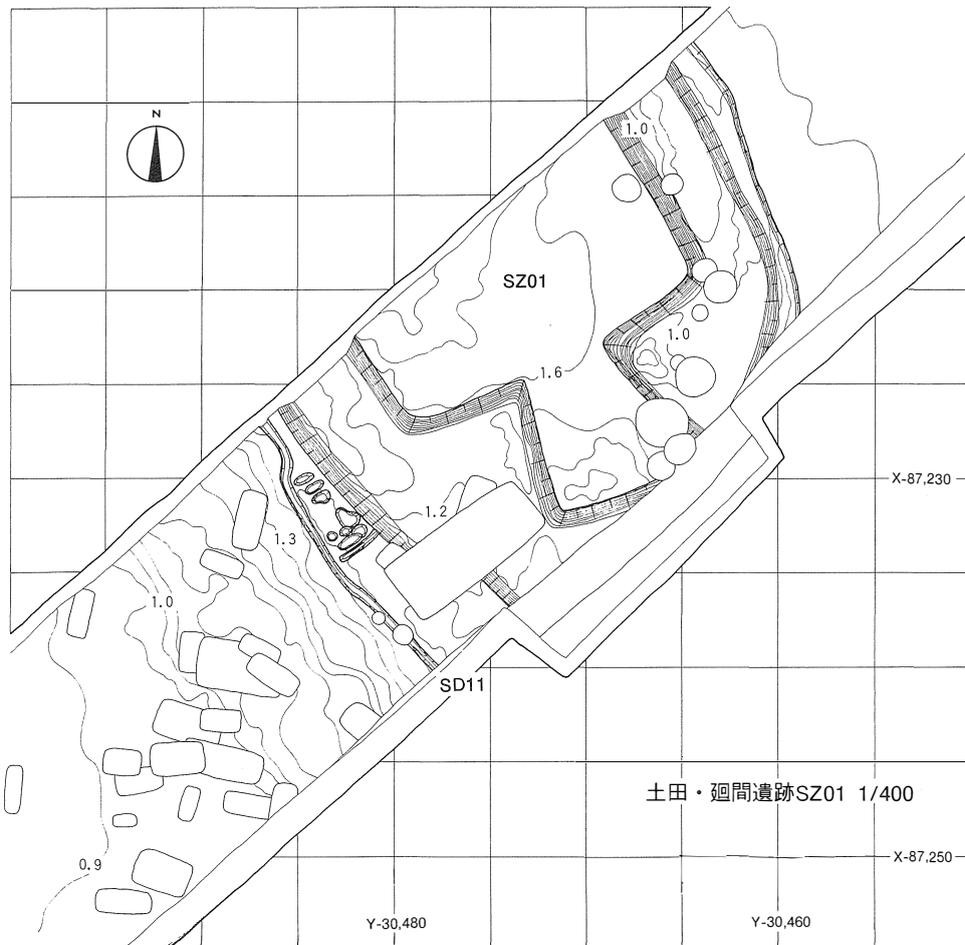
今回ここに紹介するものは古墳時代初頭の前方後方形を呈する低墳丘墓（SZ01）であり、本年6・7月の調査で確認されたものである。海拔1.6mの微高地西縁端に立地し、後方部北側は調査区外となるが、ほぼ全長25m（推定）後方部幅17m、前方部8m、幅7.5mを測り幅

5.5mの周溝が廻る。西溝西側には小溝（SD11）が平行して走り、東溝屈曲部から欠山～元屋敷期に所属する土器投棄が見られた。

本調査区周辺で、他にほぼ同時期の墳丘墓を現状で3基確認しており、また近接地で同時期の竪穴住居跡が多数検出されつつある。現在調査中であるが、土田・廻間遺跡は微高地上に立地する墓域と居住域が接して営まれた古墳時代前期を中心とする集落跡と考えることができる。（赤塚次郎）

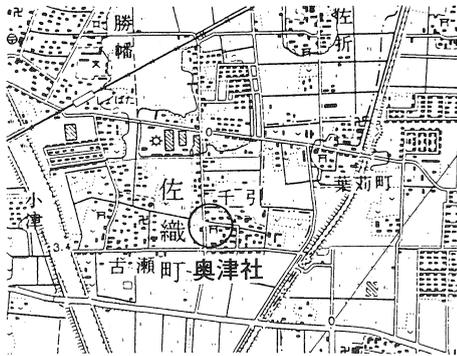


SZ01 東溝屈曲部出土土器 1/4



史跡散歩 No 1

奥津社の古鏡



名鉄津島線勝幡駅から南東 600m に海部郡佐織町奥津社が鎮座する。昭和51年神社に長く保管されていた古鏡が古墳時代の三角縁神獣鏡(3面)であることが確認された。海拔零メートルという悪条件の自然環境下の地から、古代史上最も重要な資料とされる古い形の鏡群の発見は古代史上に大きな波紋をなげかけた。奥津社鏡の発見から10年たち低湿地帯の発掘調査が進む中、大湿原地帯の開発に挑んだ我々の祖先の足跡として改めてその価値を問い直されつつある。  
 \*奥津社の三角縁神獣鏡(波文帯竜虎鏡・吾作銘四神四獣鏡・日月銘獸文帯四神四獣鏡) 昭和52年2月7日県指定文化財  
 参考文献 岩野見司「愛知県海部郡佐織町奥津社の三角縁神獣鏡について」(『考古学雑誌』62-2, 1976)

センターニュース

市町村職員発掘調査技術等研修会の開催

市町村における埋蔵文化財保護及び発掘調査体制の整備・充実を図るため、埋蔵文化財担当職員を対象とした研修会を行う。

1. 基礎研修会

12月11日～13日 於愛知県中小企業センター 定員60名 埋蔵文化財に関する基礎的知識・技術を修得しようとする者を対象。

2. 専門研修会

2月3日, 4日 於愛知県中小企業センター 定員50名 埋蔵文化財担当専門職員を対象。

調査録

<発掘調査>朝日西遺跡, 清洲城外堀を調査し, 同地点にて弥生時代方形周溝墓5基を検出し朝日遺跡の南限を確認。松の木(廻間)遺跡A・C区欠山～元屋敷期の竪穴住居跡35棟を検出。  
 <整理作業>朝日遺跡A区弥生時代中期の貝層を採取。一部についてフローテーションを実施。多量の獣・魚骨にまじり管玉, 骨針, 骨鏃, 骨製装飾品等の小型製品を多数発見。

来訪者(7月～10月)

8月28日 江原昭善(京都大学霊長類研究所)  
 10月17日 岡田恭順・平野吾郎((財)静岡県埋蔵文化財調査研究所)

日誌

8月5日 清洲町「親子文化財教室」見学  
 8月20日 新川町「文化財教室」見学  
 9月3日～20日 奈良国立文化財研究所主催の埋蔵文化財発掘技術者専門研修「鉄器保存課程」宮腰健司主事参加  
 10月1日～11日 同前「埋蔵文化財情報課程」酒井俊彦主事参加  
 <現地説明会開催状況>

7月13日 清洲城下町遺跡60B区  
 8月3日 石堂野遺跡  
 8月10日 朝日遺跡60A区  
 清洲城下町遺跡60C区  
 8月31日 土田遺跡60A区  
 9月7日 大淵遺跡60B・D区  
 9月14日 阿弥陀寺遺跡60C区  
 10月26日 阿弥陀寺遺跡60B区

人事異動

採用 10月1日 松田訓(嘱託)中野良法(嘱託)

埋蔵文化財愛知 No 2

発行 昭和60年11月  
 編集 (財)愛知県埋蔵文化財センター  
 〒450 名古屋市中村区名駅二丁目44番5号  
 名駅パークビル9F  
 TEL 052-586-3155  
 印刷 東海プリント社